

20

蒲郡

蒲郡北部小学校

フルタニ アツキ

古谷 敦稀

分科会番号

3

分科会名

社会科教育(小学校)

研究題目

社会的な見方や考え方を働かせ、

仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業

—4年「水道水を支えているのはどんな人?～水はどこから～」の実践を通して—

研究要項

1 蒲郡市社会科部会の研究題目のとらえ方

「社会的な見方や考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」を蒲郡市社会科部会では、以下のようにとらえている。

- ①「社会的な見方や考え方」とは、社会的事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類・統合したり、生活に関連づけたりすることと捉える。
- ②「仲間とともに」とは、学びを通してかかわるすべてのものを仲間と位置づけ、社会的事象を主体的に捉え、学びにかかわるすべての「人」「もの」「こと」に対し、様々な立場や考え方を多面的・多角的に取り込みながら、自らの学びを深める。さらに、問題解決に向けてそれらの考えの共有や合意を経て、問題解決に取り組み続けていく姿と捉える。
- ③「よりよい社会づくりへの参画をめざす」とは、自分にとって身近な社会的事象と出会い、産業や文化を継承し、発展する活動にかかわっていこうとする資質や能力を養っていくことと捉える。

2 主題設定の理由

本学級の子どもは、授業においては関心をもったことについては意欲的に調べることができ、自分の考えを周りに積極的に伝えようとしている。

『ごみの処理と利用』では、蒲郡市環境清掃課の人からごみの最終処分場が灰でもうすぐいっぱいになるという話を聞いた。可燃ごみの量を減らす方法を考え、家庭で実践した。生活を支える仕事をしている人と直接かかわることで、地域が抱える課題について考え、自分たちも解決に向けた方法を考えることができた。しかし、その方法を実生活に生かしたり、周りの人たちへ広めようと動き出したりするところまでには至らなかった。

仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざすためには、身近な現象を自分事として捉える必要がある。そこで、東三河地域は水に苦労してきた歴史があり、蒲郡市は近年でも水不足による使用制限がなされたという地域性から水を教材として取り上げ、水資源を守るためにできることを考えていく単元を構想した。水にかかわる人として、子どもたちが生活する蒲郡市だけでなく、東三河地域の人とのかかわりを通して、生活を支える人の思いに触れる。意欲的に追究しながら学びを深めていくことで、自分たちのためだけでなく、自分たちがかかわった人たちのためにできることを考え、よりよい社会づくりに参画していこうという思いを高められることを願う。このことから、研究主題を『社会的な見方・考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業』とした。

〈めざす子ども像〉

- ・問題解決のために、「人」「もの」「こと」とかかわりながら意欲的に追究し、学びを深める子
- ・追究の成果を自分の生活につなげたり、周りの人に広めたりしようと動き出す子

3 研究の仮説と手立て

(1) 研究の仮説

仮説 I 実生活とのかかわりを知るシミュレーション活動を行ったり、地域の人や水を支える人とかかわる場や施設見学する機会を設定したりすれば、「人」「もの」「こと」とかかわりながら意欲的に追究し、学びが深まるだろう。

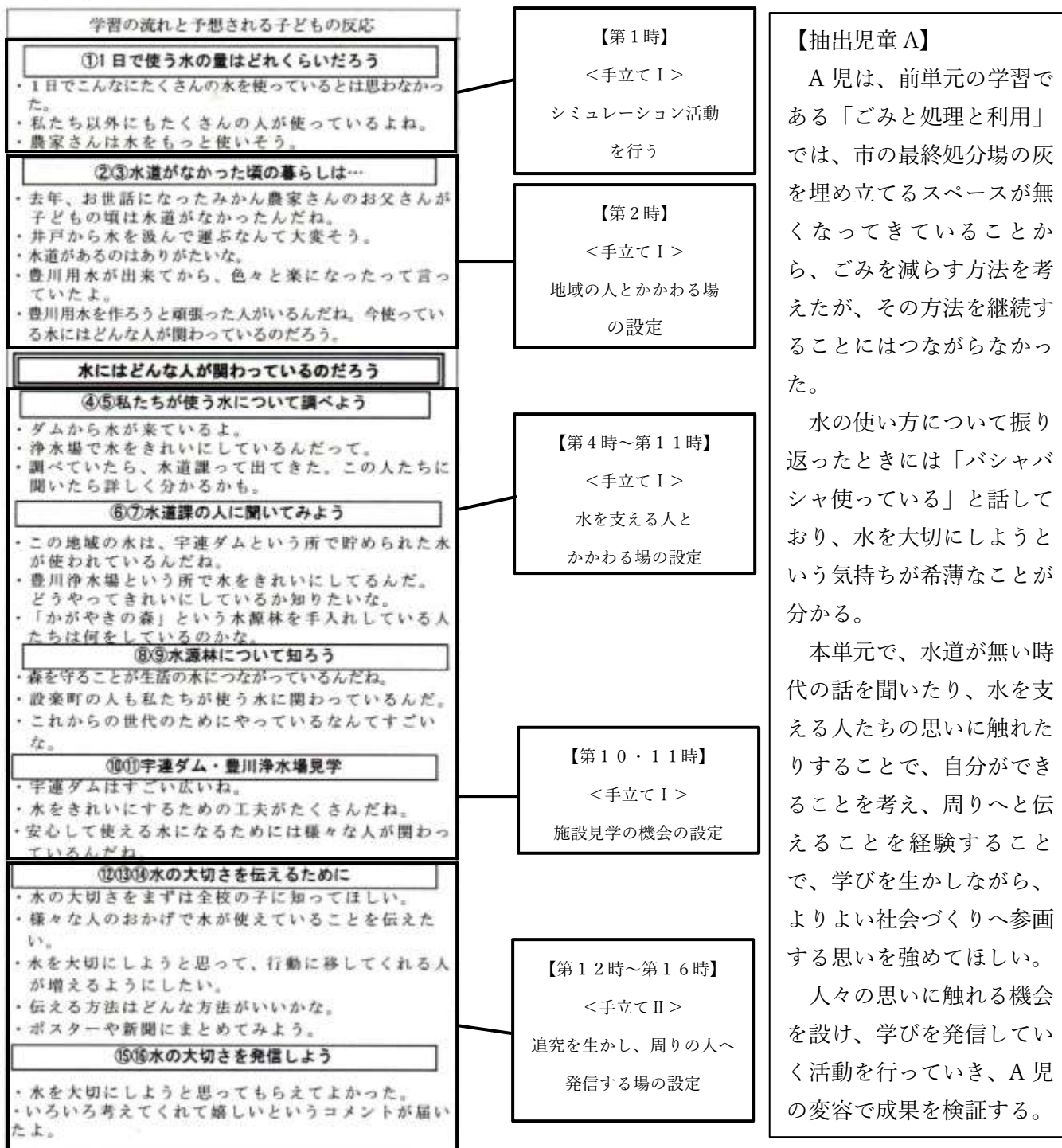
仮説 II 追究を生かし、周りの人へ発信する場を設定することで、相手意識をもって伝える内容を考え、追究の成果を自分の生活につなげたり、周りの人に広めたりしようと動き出すだろう。

(2) 研究の手立て

手立て I シミュレーション活動、地域の人や水を支える人とかかわる場、施設見学する機会の設定

手立て II 追究を生かし、周りの人へ発信する場の設定

4 単元構想と抽出児童 A



5 授業実践と考察

(1) シミュレーション活動や「人」とのかかわりを通して、追究意欲を高めながら学びを深める A 児 (手立て I の検証)

第1時では子どもたちに、水が生活に必要なものであるという思いをもってほしいと考えた。そこで、普段の生活でどれだけの水を使っているのか知るためにシミュレーション活動を行った。水を使う場面を挙げていき、学校で実践できることにつ

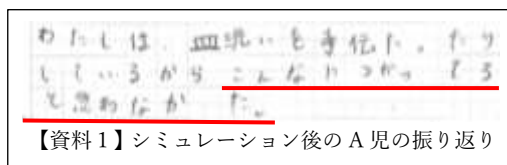
いてシミュレーションを行った。洗顔や皿洗いは実際に行い、桶に使った水を貯めて重さを量った。できないものについては、インターネットで使用量を調べ、1日のおおよその使用量を求めた。それぞれの班で量った重さからおよその使用量を算出した。その結果を見て、A児は経験したことがある皿洗いについて触れ、「こんなにつかっていると**思わなかった**」【資料1】と振り返りに記した。このことから、今まで目を向けてこなかった水の使用量を知ったことで、生活の中で水が果たしている役割の大きさを知ることが分かる。

水がないと困ることが多そうだと考える子が多くいたため、第2時では水道が使えるようになる前の暮らしについて話を聞くことにした【資料2】。前年に子どもたちがかかわったみかん農家の家族に、水道通水前の暮らしを知る方がいたため、学校にお招きした。水道が使えるようになるまで井戸水を使っていたことや水不足になりやすい地域

であること、豊川用水ができたことで生活が変わったことについて話していただいた。A児の振り返り【資料3】に「いつもジャバジャバ使っている」とあることから、A児は水を無駄にしないという意識を日常的にはもっていなかったことが分かる。また、ダムについて「あまりよく観察したことないのでしらべてみたい」とある。自分の目で見たことがないダムについて興味をもち始めており、ダムについて調べてみたいと追究意欲が高まっていることが分かる。

第3時では、水が届くまでの流れに興味をもった子どもが多かったことから、タブレットを使って調べ学習を行った。自分たちが使っている水が宇連ダムから来ていることや、豊川用水が大野頭首工を起点にしていることや、豊川浄水場できれいになった水が使われていることを知ることができた。しかし、そこでどのようなことがされているのかという詳しいことは知ることができなかった。市役所に水道課があることを見つけた子どもがおり、水道課の方から話を聞くことになった。

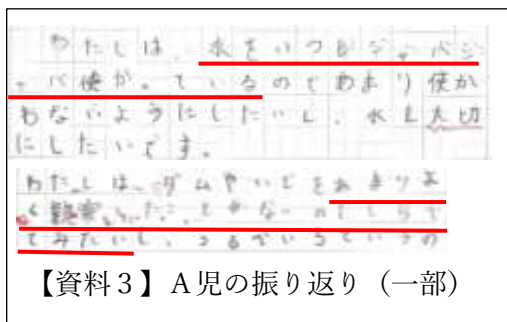
水道課の方からは、子どもたちのもとに水道水が届くまでの流れや水道課の仕事内容を中心に話をしてもらった。市内で水道管破裂による漏水が起こった時には、40時間働いたという話があり、A児を含め多くの子どもたちが驚いていた。A児は振り返り【資料4】に「働いてくれてすごい」「私たちのために」と記している。水道課の方を自分たちの生活のために働いている存在として捉え始めており、水を支える人の努力



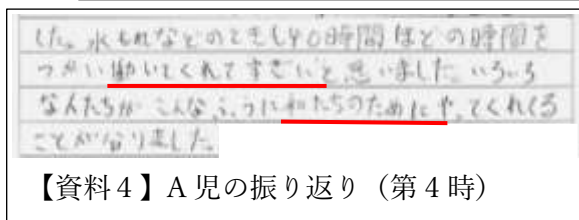
【資料1】シミュレーション後のA児の振り返り



【資料2】地域の方の話を聞く子どもたち



【資料3】A児の振り返り（一部）



【資料4】A児の振り返り（第4時）

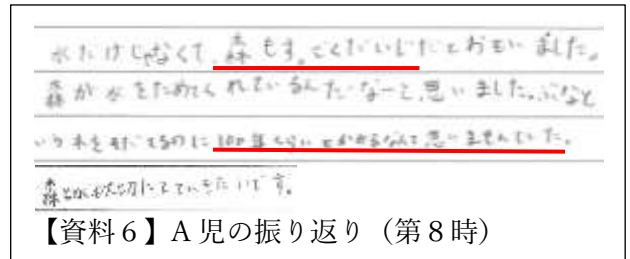


【資料5】水源林を管理する方の話を聞く子どもたち

に目が向き始め、自分の学びが広がっていることがうかがえる。

また、水道課の方から、設楽町に蒲郡市が管理をしている水源林「かがやきの森」があり、そこを管理している人がいるという話があった。それを聞いた子どもから、水源林とはどのようなものなのか、管理はどのように行っているのかのついて知りたいという声があがった。そこで、「かがやきの森」の管理を行っている方をお招きして、水源林のことについて話を聞く機会を設けた。【前頁資料5】

水源林を管理している方の話を聞いた後の振り返り【資料6】にA児は、「森もすっごくだいじ」と記している。水と森のかかわりについて話を聞いたことで、森の必要性に気づいたことが分かる。また、「100年くらいもかかるなんて思いませんでした」とも記しており、森をつくることに長い時間を要することを知り、そのようなことに取り組んでいる人の存在を知ったことが分かる。水を支える人の中には森を管理している人もいることを知り、森を大切にすることが水を大切にすることにも繋がるという新たな認識を得たことが見て取れる。

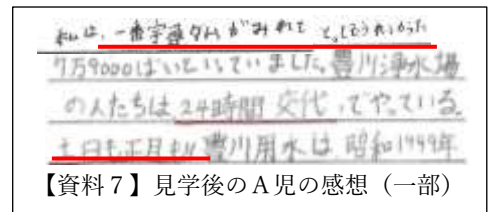


【資料6】A児の振り返り（第8時）

自分たちが使う水の始まりとして、水源林について知った子どもたち。その後の水の行方について興味をもったため、宇連ダムと豊川浄水場への見学を行った。

宇連ダムでは、ダムの役割や管理する人の仕事について話を聞いた。実際に宇連ダムを見ながら設備の説明を聞いたり、この年の6月にあった大雨の時の対応についての話を聞いたりした。

その後、豊川浄水場の見学を行った。浄水場で行っていることやいつでも水が使えるように、常に管理を行っていることを話していただいた。その後、浄水施設を周りながらそれぞれの場所で行っていることの説明を聞いた。



【資料7】見学後のA児の感想（一部）

これらの見学を終えたA児の感想【資料7】には「一番宇連ダムがみれてとってもうれしかった」とある。A児が単元の導入でダムへ興味をもち、自分の目で見ることに実現したことへの喜びが伝わってくる。

また、浄水場で働く人について「土日も正月も！！」と記している。土日やお正月も24時間体制で働いているという努力をしたことで、自分たちの生活に必要な不可欠な存在であることに気づき、学びが深まっていることが分かる。

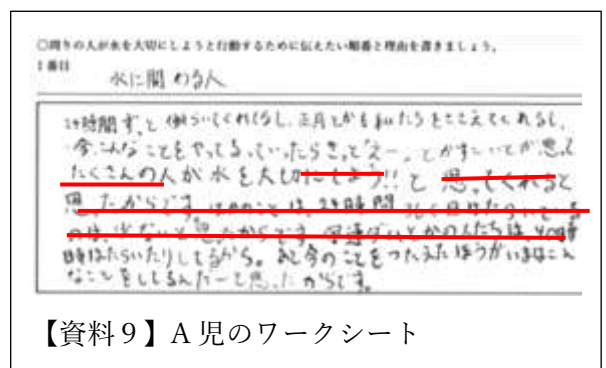
（3）学びを生かして、よりよい社会づくりへ参画し

ようとするA児（手立てⅡの検証）

水にかかわる人たちの思いに触れてきた子どもたち。見学を終えて、それぞれの感想を共有する時間を第12時に設けた【資料8】。そこで「水を大切にしていきたい！」という発言が出たため、水を大切にしていきたいために自分たちにできることについて考えた。水を無駄遣いしないといった実践することについての意見が出る中で、「周りの人に伝えたらいい」という意見が出た。そこで、その意見について取り上げてどのような方法で伝えていくのか、誰に向けて伝えるのかを考えた。様々な相手が出された

- C1：ダムや浄水場の人は24時間管理してくれていることが分かった。
- C2：水を大切にしていきたい！
 - T：そのためにみんなにできることはあるかな？
- C3：水を出しっぱなしにしない。
- C4：お風呂のお湯を洗濯に使う。
- C5：周りの人にも大切にしてほしい。
- C6：周りの人に伝えたらいいと思う。

【資料8】第12時の授業記録



【資料9】A児のワークシート

が、多くの人へ伝えることが容易なことから、全校児童に対して伝えることになった。続いて、全校に伝えることを個人で考えた。A児は、昔の人の頑張り、ダムや浄水場の人たちの頑張り、水を無駄遣いしない、森も水にかかわっていて自然を大切にすることを伝えることとして挙げた。

それぞれ伝えたいことをいくつか挙げた中で、一番伝えたいことを考えた。A児は水にかかわる人について、一番伝えたいこととした【前頁資料9】。その理由のなかの「24時間ずっと」「正月とかも」「ささえてくれる」からは、自分たちの生活を支える人々の存在と那些人たちの苦勞について知ってもらいたいと考えていることが分かる。また、「今、こんなことをやっているっていったらきっと「えー」とかすごいとか思ってたくさんの人が水を大切にしよう！！と思ってくれる」とある。これまで、昔の暮らしや水にかかわる人々の話から水を大切にしようという思いをもっていたA児。周りの人が水を大切にしようと思うには、昔の暮らしについてではなく、今の水道を支えている人について伝えたいほうが周りの人が行動する原動力となるだろうと考えていることが分かる。

第13時では、一番伝えたいことについて話し合いを行った。A児は「24時間働いているくれる人がいないと夜に水が飲めなくなっちゃう」「24時間頑張る人がいるから、私たちも節水しようと思ってもらえる」と発言している。自分たちのために苦勞している人たちのことを知ってもらいたいと考えていることが見て取れる。

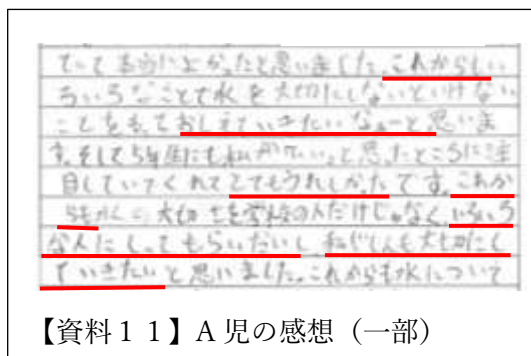
第15時から全校に伝えるためのまとめの作成を行った。A児は水にかかわる人について伝えるグループに所属した。伝える方法をグループの中で決めたところ、A児のグループは新聞にまとめ、それを全校の教室に掲示してもらうことになった。A児のグループは低学年用、中学年用、高学年用、特別支援学級用の4種類作ることとなり、A児は高学年の学級に掲示する新聞づくりを担当した。すでに水について学習をしている学年を対象にした為、水が届く流れについては触れず、水を支えている人を中心にまとめた。新聞に取り上げたのは、蒲郡市水道課と豊川浄水場の人である。このことから、自分たちの生活に近いところで水にかかわっている人について取り上げたといえる。また、新聞【資料10】の水道課の人と浄水場の人両方に「365日24時間」とある。いつでも水が使えるように働いていることを知ってもらおうと考えて作成したことが分かる。また「わたしたちに安心して飲めるように」からは、水を支える人の頑張りや自分の生活に落とし込んでいっているといえる。写真を用いたり、線を引いて強調したりと伝わりやすくなるように工夫をしていることから、周りの人に働きかけようとして動き出していることがうかがえる。



【資料10】A児が作成した新聞

完成した新聞をそれぞれの学級に配りに行き、掲示してもらった。それぞれの学級に新聞を見た感想には「水を大切にしていきたいと思った」「働く人の頑張りがわかった」とあり、子どもたちにフィードバックした。水道課の方や水源林を管理している方からの感想も頂き、子どもたちに伝えた。

新聞を見た他学年の子どもたちや水道課の方、水源林の方からのコメントを読んだ感想【資料11】にA児は、「これからも」と何度も記しており、「おしえていきたいなあー」「とてもうれしかった」「いろいろなひとに知ってもらいたい」からは学びのまとめを伝えたことで、周りの人の思いを変える経験ができたことから、自分たちの行動で周りの人たちの思いを変えることができた喜びを感じ、今後もよりよい社会づくりのため



【資料11】A児の感想（一部）

に動き出そうという思いをもっていることが分かる。また、「私じしんも大切にしていきたい」からは、水を大切にすることを自分事として捉え、よりよい社会づくりのために自分も行動していこうという思いの高まりが分かる。

6 研究のまとめ

(1) 研究の成果

I シミュレーション活動や地域の人・水を支える人とかかわる場、施設見学する機会の設定

生活の中で当たり前のように使っている水を教材とし、導入部分でシミュレーション活動を行った。それによって、自分たちが多くの水を日常的に使っていたことに気づくことができた。これまであまり意識してこなかった水に目を向けることができたことで、水への興味を抱かせることへとつながった。水へ関心が芽生えたところで、水道が通水する前の生活を経験している地域の方から話を聞く機会を設けた。水道が無い頃の苦労について話を聞いたことで、蛇口をひねるときれいな水が出てくる水道のありがたみを感じることにつながった。また、水が蒲郡に届くまでに様々な施設を通過していることを知ったことで、水道を支えている人、ものについて知ろうという追究意欲につながった。

水道を支える人へ意識が向いたところで、蒲郡市水道課、水源林「かがやきの森」を管理する方、宇連ダムを管理する方、豊川浄水場の方とかかわり、それぞれの思いを聞く場を設定した。これまで何気なく使っていた水には様々な人がかかわっていることを知り、その人たちの支えのおかげでいつでも水を使うことができているということを実感することにつながった。水道が無い頃の暮らしについて知る地域の方や水道を支える人々とかかわる機会を設けたことで、水道について意欲的に追究することができた。

多くの人とかかわったことで、「水が使えるありがたさ」や「水を支える苦労」を知った子どもたち。それぞれのことから水を大切にしようという思いをもつことができた。人とかかわりから多面的に水の大切にしようという思いをもつことができた。

II 追究を生かし、周りの人へ発信する場の設定

水道を支える人々の思いを知ったことで、「水を大切にしたい」「周りの人に伝えたい」という思いをもった。伝える内容について考えていくときには、どのような内容を伝えるのが効果的かという視点で考えた。水を支える人たちとかかわったことで努力や苦労を知り、水をより大切にしていこうと考えた抽出児童A。水を支える人の努力や苦労を伝えることで、周りの人が行動する原動力になるだろうと考え、これまでの追究を生かした新聞にまとめることができた。

また、追究の成果を全校児童に対して発信を行う場を設けたことで、「水を大切にしてもらうために」という思いをもって動き出すことができた。発信した後に相手から感想をもらったことで、自分たち追究の成果がどのように伝わったのかを知ることにつながり、「これからも教えていきたい」「周りの人に知ってほしい」という思いをもった。自分たちが追究してきたことを周りの人へ発信し、伝えた相手の思いを変える経験をした。それによって自分たちの学びに価値を感じ、生活につなげたり周りの人に広めたりしようと動き出すことができた。そして、周りへ伝えるだけでなく、自分自身も行動しようという思いをもつことができた。よりよい社会づくりへ参画しようという姿につなげることができた。

(2) 今後の課題

今回の実践では、以下の点が今後の課題として残った。

・よりよい社会づくりへの参画としての活動が継続することができなかった。

⇒子どもたち自身が学びを生活に結び付け、継続して学びを生かしていくことができるようにしたい。

今後も多くの人とかかわる機会を設定し、様々な形でよりよい社会づくりへの参画をめざす実践を考えていきたい。